

五日市町方言調査の記

藤 原 与 一

あらまし

- 1、身のまわりに、たいせつなものがある、ということを書きたいと思います。
- 2、どんなしごとと、発見のたのしみを味わせてくれる、ということを書きたいと思います。
- 3、方言のしごとと、いろいろと、私どもの人生なり考えかたなりに、深くかかわってくる、ということを書きたいと思います。

その一

広島県佐伯郡五日市町に、私どもが住みついたのは、昭和二十七年の末でした。それから今日まで、五日市町の土地ことばを聞いてきて、まずはこの地のことばを、だいたいは、承知したつもりになっています。ことがらも、もはやさうとうに、いろいろなことがわ

かったように思います。

ひっくりかえって申しますと、自分の住む五日市町のことばは、たいいてい、けんとうがつく、といったあんばいです。

したがって、へいそは、五日市町のたいていのことに、さして心が動かず、かくべつのおもしろみをおぼえることなどはないのです。いつのまにか私は、このことはもうわかった、たいしたことではない、という、むぞうさな気もちに流れてしまっていたのです。

人は多くこうなりがちなのではないでしょうか。あまり変わらばえのしないものを見、聞きした時なども、単純に、ああ、そうかと思ひ、心のとびらを開こうとはしません。ときにめずらしく、アフリカの原住民族の生活の話などを聞きますと、これはいかにもことと変わっているものですから、ねむい気もちなどバツとはねのけて、ひざのり出し、聞き入ってしまいます。

何もなさそうに思える所に、もし、アフリカ話しなみのことがあつたらどうでしょう。「何もない。」と、見くびることは、よくないと思います。どこに何があるかもしれません。あんがい、身のま

わりの、ごく手近な所に、たいせつなものがころがっていたりするのではないでしょうか。

ゆだんはならぬ、ということが、つねに言えそうです。

去年の九月、方言を聞こうとする、軽い気もちで、私は、一人の同僚といっしょに、五日市町内の坪井という所に、一老翁を訪ねました。じつは、かねて知りあっている別の人をまず訪ねて、その人に私の希望を述べ、やがて、その人の案内で、私どもは、その老翁ご夫婦を訪ねることができたのです。

なんと、このおじいさんが、明治四十三年九月十六日このかた、ずっと、日記を書きつづけてきていられるのです。

私などのうまれた年のつぎの年からです。私は、文字どおり、ホーッと、嘆声を発してしまいました。おじいさんは、ことし八十八歳です。(およめさんおばあさんは、八十三歳です。)今も、元氣よく、毎日、その日その日に、たいてい夜分、日記をつけていられます。

はじめられたのは、おじいさんの二十三歳の時、ということになります。

それから今日まで、たゆみなしの、毎日の記述です。「病気で休んだ時は、書いていない。タイギナケー(から)。」と言っているらしい。それは当然のこととして、無事に書いてこられた歴史が貴重だと思います。

「書く」ことについての、こんな貴重な体験者が、五日市町内にいられようとは、思ひかけないことでした。(私の、つまらない一

人がってですけれど。)あらためて、私は、この抜群の人に、目を見ひらいたのです。

その二

日記のいちばんはじめには、親類の人がハワイに行くので見おくれた、という記事があります。「ハワイ国渡航」とあったかと思えます。それを見おくるおじいさんは、ご自分のことを、「拙者」と言っています。たちまちうれしくなりまして、他の冊も、ところどころ見せていただきました。

ことばの宝庫です。単語から言っても、文章・文体などから言っても、また、内容の歴史的事実から言っても、各日記帳は、おもしろいことだらけ(と言っては失礼ですが)です。

今年にはいって、私は、あらかじめ電話でお願いしておゆるしを得、そのあとすぐに、原稿用紙を持って、おじいさんをお訪ねしました。

「ところどころ、たとえば、四、五年めのところで一日というように、おもしろいところを、抜きがきして下さいませんかというか。」

と、おたのみしたわけです。おじいさんは、やってみようと、ひきうけて下さいました。

私のゆめですけれど、もし、毎年の正月元日だけをでも、通して、書き写させてもらえたら、どんなにすばらしいことでしょう。が、ものは日記です。私は、見せてもらった時も、一々、おじいさ

んにことわって、極度に遠慮したのでした。

ひきうけて下さったおじいさんに、ひたすら、期待いたすほかはございません。ところで、おじいさんは、どう、とちがえられたものか、日記の抜萃ではなくて、要約のようなものを書いて下さったのでした。

私は、それを、おしただいて帰りました。これは、＂どのようになでも＂と、私に発表をゆるされたものです。記念に、はじめの部分を、ここにかかげさせていただきます。

五日市町廿日市町境界山極楽寺を観音山とも称す表高約五百余メートル其南麓に村落有一隅に生れし私当時の構成人員は祖父母に父母私成長して家内を貫ひ三夫婦にて極楽寺山より流るる水に育ち今日迄長寿を保ち戴いています祖先も三夫婦現在も三夫婦にて楽しく暮さしていただいています感謝して皆様の為になりたいと念願しています。

その三

おじいさんとの出会い、これは、私の方言調査のしごとの中のことなのです。そして、おじいさんの、世にまれな日記体験の中に、はいらせてもらったのも、じつに、「方言調査」のしごとそのものの中でのことなのです。

私は、方言を調べに行きますと、まず、その、根っからの郷土人に会うことにつとめ、会うと、できるだけ早く、その人たちの郷土生活の中に入れてもらうようにつとめます。心をすなおにして、

ひたすらに、相手の身になっていけば、比較的早く、私どもは、相手がたの日常生活の気分の中へ入れてもらうことができます。誠心誠意、おたのみする心になれば、この心は、かならず先方に通じるように思われます。

相手がたに受け入れてもらってこそ、その人たちの、なまの、生活のことば、すなわち、方言の一々が、聞きとられます。方言調査のためには、どうしても、その生活の中に、どっぷりとつかうようにしなくてはなりません。私は、おじいさんと、日記のことを話しあいながら、その、おじいさんの、生活の深みの中で、五日市町坪井の方言生活を、受けとらせてもらったのでした。

もとより、当方の調査には、一般的な目的や特殊的な目的もあります。それは当然のことです。ですが、これをはじめから表に立てて、相手にむきつけの質問をしていったのでは、みずみずしい調査は、しはたすことができません。生きたことばの事実をぐあいよくすくいあげることなどはできません。ここはどうしても、目的を心にととのえ持ちながら、しかも、相手の気こころにさおさしていく、生活本位の調査法がだいじになります。

私は、おじいさんと生活をともにすることにつとめながら、かつは、私の願いをもそこにしぜんな形でうち出して、所期の本道を進むことにつとめたのでした。

しごとの一部を出してみます。

その四

おじいさんに、こんなに熱心に日記をつけさせたものは何か、と、私は考えました。そのへんの会話から、おじいさんは、ご自分の信仰生活を語ることになります。ここで私は、安芸門徒と言われる、この真宗どころの、人の、仏教信心のお話しを聞こうとします。かねて望んでいた、安芸門徒の、仏教関係の言葉を、できるだけ広く見ることに、心を寄せたのでした。

○おじいさんの若いころ、お寺まいりが、ヨルドモワ（夜なか）は「ハズンダ」ということです。「隆盛におこなわれる」のを、「ハズム」と言っています。

○マイリテガ オユー ガンシタ。

参る人が多うござんした。

○ワシノ センソガ、…………。

わたしの先祖が、…………。

（久しぶり、広島県下で、「センソ」というのを聞きました。）

○クリキガ ナイ （功力がない）

○「タリキ」―クリキを受ける。

○オブッパン （お仏飯）

ワザニ タイテ アゲル。

特別に炊いて供える。

○オハチ （米のごはん 仏さまにお供えするもの）

○オチャ トー （お茶湯）

○オブキ サン （お仏器）

○オブツダン||オナイブツ （お内仏）

○シヨージョーン ナリ マス。

清浄になります。

○オレー サシテ モローテ、…………。

仏さまにお礼をさせてもらって、

○イハイ（位牌）はない。

○センゾワ マツツチャー ナイ。

先祖（こんどは「センゾ」に聞こえました。）は、まつつてはない。

○いちばんだいじなことは、仏さまの教えを「聞ク」ということ。

と。△他力△聞けばシンジン（信心）。

○アレ（それ）ガ タリキということ。

○グチニ カエル。そして、オタスケシテイタダク。

「自分はずまらんものだ。」とわきまえる。そして、助けていただく。

○チエー ミガイトル ブンニヤ、なかなかえらくなれぬ。

知恵をみがいてる分には、…………。

○グトク シンラン （愚禿親鸞）

○アンマリ アタマガ アガルト、…………。

あんまり高慢になると、…………。

○ムガ （無我）

○ジョード シンシュウ （浄土真宗）

○△教理△ミヤスイヨード イタシ。

わかりやすいように書いてむずかしい。ワカラン。

○蓮如上人「心得たるは心得ざるなり。」

○ホンマニ シンジンオ イタダイタ ヒトデ、…………。

ほんとうに信心をいただいた人で、…………。

○アリガタイ ノー。

ありがたいことねえ。

○クセで、……………ホーシヤノ ネンブツ。

くせで、……………報謝の念仏。

真宗信者の、ふつうのお話しと言えばそれまでですが、私はこの時、おじいさんの発表から、新しく、いろいろのものをとらえることができました。「聞ク」ということは一つにしても、私は、この時、新しくこれを、とらえ直したのです。神まつりをしない生活の実相のお話しなどは、ものめずらしいものでさえありました。お正月行事などの、禅宗の家などのよりはずっと簡素であるのも、なるほどと思いました。聞いてたのしいお話しが、いくらも聞かれました。

そのお話しの多くが、また、すぐに身のためになったことは、言うまでもありません。

何の話しであつても、これだけの人生経験をつんだ人、人なみを超えて日常の努力をする人の口から出ることはことです。一々、心に深く、くい入るものがありました。方言調査にしたがいながらも、私は、人生の師に教えを受ける思いにも、ひたることができたのでした。

そうであつて、かつ、方言調査のカードは、順々に、よくたまつ

たのでした。

その五

方言調査のためには、しごとをどのように進めたか、それを、すこしだけ語ってみます。

おばあさんもずっと同席だったので、「仏道」から「年中行事」へと進んだ話しあい、こんどは、おふたりの「結婚ばなし」へと持っていました。（年中行事のお正月行事その他で、炊事の役のことなど、夫・妻の役わりのことが出ましたから、おふたりの結婚などについて聞くことは、ごくしげんにできたのです。）

おばあさんの、ここへのおよめ入りは、二十歳のことだったそうです。——この時から、おふたりでの、日々の信心ぶかい生活がはじまりました。

結婚式のお話しはこうです。おじいさんが言います。

○イマゴロタ エットドマ キカエヨッタ。

今ごろよりはもっと多く、着かえてました。（当日、花よめさんが）

○地蔵さんを十ばかり、エンヤ（えんがわ）に並べました。村の男青年たちが、遠近万々の地蔵さんを、かついでくるんですー。

○地蔵さんを、あとで、元の所に返すのがオーヤツカイ（大やっかい）。

私は、どうしてそんなに地蔵さんをおつれしてくるんでしょう

と、たずねてみました。お答えは、

○スワリガ エー チュー コト。

坐りがいいということ。

とありました。

(方々にあった、この民俗が、ここでも、このように、おこなわれていたのです。)

むすび

どの道のしごとにも、調べるたのしみがあります。調べていると、やがて、発見のよろこびを味わうことができます。

それは、心の深いところでのことだ、と言えましょう。しぜん、しごとは、全部、人間的なものになってきます。(当然のことです。)

こうなりますから、私どもは、しごとに、いよいよやりがいをおぼえるようになります。

やりがいをおぼえるようであれば、また、私どもは、身のちよつとしたことにも、早く、たいせつなもの、よいものを見つけたしていくことができます。

(50・9・28)

新刊紹介

『方言生活指導論』

藤原 与一

本書は、閉鎖的な方言生活をいわゆる方言尊重論から峻別し、方言生活の指導を、広く言語生活の中核部においてとらえなおすとともに、思索的言語生活の基軸を生活語の高揚のなかに認めようとする。前編は「基礎論」と題され、「方言生活指導の目標」「目標達成のための方法分析」「方言生活の実態」「共通語」「標準語と標準語生活」の五章からなる。中編と後編とは「指導論」と題され、「方言生活指導の原理と方法の大本」「指導面の分析と指導計画の推進」「方言語彙指導」「方言文法指導」「方言音指導」と「地域社会の国語教育」「学校教育での学年発展に応じる方言生活指導」とからなる。巻末に索引を付す。(昭和五〇年一〇月二〇日刊 A5版 二五一頁 三五〇〇円 三省堂)